

上田貞次郎先生 ——一つの評伝——

一

日本の経済学の成立期を担った経済学の先輩として誰を何人あげるかは、勿論、見る人によって違うだろう。

たとえば、一書肆の編輯者は、二〇人の先学を「わが国経済学の先駆者達」とした（有斐閣『書齋の窓』、昭和三〇、三一年）。また、たとえば、『経済学大辞典』（東洋経済新報社、昭和三〇年）は、日本経済学の項で一五人の先学をあげ、その一人一人の生涯と学説を要約してかかっている。この人数も、そのなかにあげられるひとつももちろん、わたしと見解が一致するわけでもない。しかし、こうした違った見方から異った人数にしばって誰が日本の

山中篤太郎

経済学の指導者をあげるにせよ、こと一橋に限る限り、すでに右の二つの例が示すように、その名を逸せられていない先学が二人ある。その一人が上田貞次郎先生なのである。

わたしは、偶々先生のゼミナールの学生の一人であり、実は、その故をもって、先生の急逝直後から数年前までに、先生の回想を公けに語る機会をすでに五回ほどもった。そして、そのうちの三回は、印刷となって残っている（前記『経済学大辞典』Ⅲ及び『書齋の窓』三八号、昭和三一年九月のほか、雑誌『自由通商』昭和一五年七月号）。
たまたまこの昭和四〇年五月八日には、先生逝って満二五年の祈念の日をむかえることになっている。

もと『一橋論叢』なる誌名は外かならぬ上田先生が名付け親なのである。その本誌がこの年に当り、日本の経済学の指導者たる地位を占められた一橋が生んだ上田貞次郎評伝を掲げることが、本誌にとって二重三重の義務であるとせねばならない。と同時に、わたしにとっても、たとえ、これまでの機会に既にのべたことを反覆しても、ここに先生について語る場所を与えられたことは、喜びでもある、又さげえざる責務であると私に考える。

さはあれ、わたしは先生の門生の一人であり、また、つねづね、人の面影を偲ぶわざは、所詮書かれる人の伝記を伝えるよりは、そこに筆をとる人間の方を示すものと理解している。また、たとえ、客観的に上田先生の評伝を描こうと心がけても、わが筆の前にあるのは、畢竟恩師上田先生たる以外ない。わたしは、こうした大きな枠がこの小稿を記すわたしの筆にはめられていることを無視するものではない。

しかし、そうしたことを前提の上で、ここには、上田先生が如何にして一橋をこえて日本の指導的経済学者であったかを伝えることを中心にして、できるだけ客観的

に一つの上田貞次郎伝を記すことに努力してみたい。

二

上田先生は明治一二年（一八七九年）三月一日（戸籍面は五月二日）東京麻布飯倉の紀州徳川邸内（今は貯金局が建っている）に生れた。紀州藩の学者上田章を父とし、同藩の松尾家より嫁した良子（又はつな子）を母とし、六歳年長の兄敬太郎をもった。父は明治一四年逝去し、先生はその悌を記憶しないが、当時紀州家家扶であったものの、先生自身その随筆に「日本で何処へ出しても恥かしくない」有数の人物であったとされている。そして、母良子は明治二九年（先生一八歳）に歿するまで弱小の二児をかかえて一手に育てたのである。

これが先生の人生の出発点であった。飯倉の邸内で満五歳を迎えた先生は、明治一七年麻布森元町の公立飯倉小学校に入学、制度の変更に遭って高等科四年を終るまで七年間ここに通った。明治二四年小学卒業とともに芝公園の正則中学に入学した。当時、築地に府立中学（今の日比谷高校）、私立では攻玉舎、慶応義塾があり、家兄も慶応に学んだのに、兄の勧めで正則を選んだ。その理

由はあまりはっきりしていないようであるが、この正則入学は後年の上田先生を生む大きな一つの契機になっている。

正則（当時予備校といった）は創立されて間もない私立学校であったが、当時東大教授だった外山正一（後の文相）や元良勇次郎や神田乃武（後の東京高商教授）や附近居住の有力者が謀って作ったものであり、しかも、これらの人々は直接教壇に立った。上田先生は、十六、七歳の頃、フランクリンの自伝を読んで、強い感銘をうけ、その十二則に倣って自ら「修身則」を作り、謹言、慎重、厳密、経済、摂生、勉強、大胆、寛大、決断、礼義、高潔、仁愛の十二箇条を立てて、日々反省し、これが、後年の自由人上田貞次郎を作り出す岩盤になっている。そのような方向に当時先生を歩ませたものは、家庭や交友等の影響もあるが、この中学の指導者達の影響が顕著であったと見られる。先生自身も、とくに元良の授業及び人となりの感化、あるいは博物の担任、猪間収三郎による進化論への開眼等が生涯に大きな影響を与えたと認めているのである。

中学から先生は神田の東京高等商業学校に進み、明治

三三年卒業、更にその専攻部に学んだ。卒業のころまでは実業界にはいるつもりであり、横浜正金銀行入社に大半きまっていた。それにもかかわらず、新婦朝かつ新進気鋭の福田徳三教授のすすめで母校の教壇にのこることにいわば一転している。

自ら当初は志されなかった学生生活がその後の上田先生の生涯になってしまっている。そして、日本の経済学はまたここに期せずして一人の偉大な指導者を迎える結果になるのである。そして、先生は、明治四二年貞子夫人をめとり、四人の男子の父として、一橋での研究生活を辿ったすえ、昭和一五年（一九四〇年）五月八日東京商科大学長在職中、急性盲腸炎のため東京慶応病院で逝去している。だから、満六一歳に達したばかりの時であり、決して長命とはいえない。にもかかわらず、この間に多くの先駆者的、指導者的業績を日本の経済学のために先生はのこすことになるのであるが、このような経歴を今から見ればかなり突然の決心で始められたのである。このことは、日本の経済学にとってはまことに幸であったとせねばならない。

この学問上の足跡は、勿論、本来上田先生のもった天

賦の才能にして始めて可能であつたものであることはいうまでもない。父上田章が江戸の裕福な家の出でありつつ、学を好み、その儒学の故に紀州家の士分にとりたてられ、明治期の紀州出身の名士にして「上田章先生」を崇敬した人が多数を占めているほどであつたことも、後年の上田貞次郎を生む大きな地盤になつてゐるであらう。又、母系の祖父も医家として有力な地歩をもつたことも想起すべきであらう。他面、あるいは、もし、先生が道を学問にとらなかつたら、先生の力をもつてしても、日本の経済学がその建設者の一人をもちえたか否かは疑わしいともいえるであらう。

しかし、それらの諸条件の影響を否むことなしに、わたしは、上田先生とその学問が上田その人の人となりとその後天的努力とによって「作り出された」ことの多いことを強調したのである。いな、強調しなければ、後に見るような上田経済学ともいふべき個性にみちた学問上の足跡は生れなかつたし、又、それを正しく理解できないとみるからなのである。

まことに、字義通り、上田先生の学問に「文は人なり」を痛感するからである。

三

そこで、経済学の指導者上田貞次郎をみるわたしの最初の観察は、上田先生その人の生い立ちから始めざるを得ない。

旧藩の学者を父とし、紀州邸内で青年期まで過ごした上田先生が「士族」風の生活環境の中にあつたことは見逃しがたい。しかし、一橋の卒業まで、俗曲にいう「芝で生れて神田で育ち」を地でいった意味では、東京人であつたともいえる。だから、士族風といつても東京風のことよい士族であり、地方から持込まれた野暮な士族風ではない。淡泊な味の食物に対する好みやなかなか鋭い味覚やを持ち、「読まない本を買うよりうまいものを食べた方がいいよ」とはつきり言つた態度、あるいは、夫人と長唄をならつたりした生活、には、東京育ちの筋がやはり流れていたように見える。名前はもと貞次郎が正しかつたのだが、長じて、人の使うままに貞次郎と字もよみ方もかえてしまつてこたわらない。この淡々とした風格も同じ根から生れたものといえそうである。ここにいう東京風は、江戸、下町といったものではないにせよ、

さらりとした東京風というべきものである。士族とか下町風とか、現代の人々には、あまり重要に感じられない社会生活の指標であるが、明治中期までの日本では、その人となり、ものの見方に強く影響する重要な生活地盤だったのである。こうした士族的でありつつ東京人的生活感が貫いているという特質には、多分に直接の生活環境のほか父祖からうけついで特質もあったと思われる。両親は共に紀州藩士であるが、しかも共に、その祖父の代には江戸の町家の人であつたからである。才能ある商家出身者の士族登用は幕末には例が少くなかつたであろうが、江戸庶民の生んだ材幹を中核とする武士、といった注目すべき人間類型をここにみるのである。

人はこうした生活環境からきた外面で先生を後年まで受けとるのであるが、実はこうした外貌の内面にすでに青年期から先生は新しいおのれを努力して作り出しつつあつたのである。そして、この内面的人間形成の過程こそ後の上田先生を構成する本質となることに注目しなければならぬのである。

青年上田は、晩年を病弱にすごした母をかかえて家居を守る日が多く、青年らしい運動にあまり時間がさけな

かつた。そのためもあってか、体は小柄であつた。しかし、平素の行住坐臥はまことに落ちついた襟度を保つた。高声や早口などは先生に全く無縁のものであつたといえる。先生は色も浅黒い方だったので、その壮年の頃、一橋の学生は、「……背の低い南洋の土人が川岸に立つて何やらブツブツ独り言をいつている……」と夢みた途端ひる寐が覚めて、気がついたら、午後の教壇で上田教授が静かに歩みつつ商工経営の講義を続けているところであつた、といった月旦をしたものであつた。先生は雨傘を出先で忘れるので知られていたが、この無頓着さは、始めの西欧留学中にももう発揮されていたことであつた。つまり、こせこせしないで、いわば、春風駘蕩の上田先生とは、急ぐとか、激すとか、昂奮すとかかいう行動は、全く結びつけにくいものであつた。大正半ば、先生のゼミナールに参加した頃、「貞城」という俳名での句作のなかに「山堂に人なくして春ひとりゆく」とあるのを見出したわたしの眼には、如何にもその人柄らしいとうつた。しかし、それは若いわたしの一人合点であつたのであって、実は、こうした淡々たる外貌は、江戸児式の無頓着ではなかつたのである。先生は、

身内に激しく燃えるものを持ちつつ、これを克己という
 厳しい修養で包んで容易に人に現わさなかつただけなの
 である。その「はげしさ」はその社会的なものに対する
 対応でも示されるが、むしろ、ここで強調したいのは、
 己れに対する場合なのである。そして、これこそが
 実は自由人上田としての先生の本質であり、この本質が
 あればこそ、先生の表現が簡にして滑かであるにもか
 わらず、そこに先生の鋭さを人に感得させざるを得な
 かつた力がひそんだのである。

この自己陶冶の努力が青年期の先生の人格形成に加
 えられた事実は、晩年記された随筆でも知られてい、その
 陶冶の内容がさきにのべた元良、さらにフランクリンか
 らうけたことも知られている。しかし、その自由人とし
 ての自己陶冶のはげしさは先生の死後まで人々はしらな
 かつたといつてよい。先生は随分若い頃から日記をつ
 けてい、それはかなりの分量になっている。(明治三十八年以
 降の分は全部上田日記刊行会によって『上田日記』二巻とな
 して刊行されている。慶応書房、昭和三八、三十九年刊。ほかに、
 遺著として随筆集『白雲去来』昭和一五年、中央公論社があ
 る。) 中学末期の先生は、日々、己れの行為を顧みては、

自ら採点しつづけていたといわれる。もと先生は癡癡も
 ちで激し易いからこれを矯めなければいけないと自ら論
 し、ひそかにその矯正に力めたのであった。

先生の家庭生活の環境が癡癡もちにさせたのか、ある
 いは、先生の個性に本来とくにそうしたものがあったの
 か、あるいは、さらに、一般に正義感に強く、ものごと
 を黒白二路に峻別せねば気がすまない青年期通有の傾向
 の先生における現われであつたのか、今俄かに判断する
 ことはできないが、わたしを強くうつものは、青年上田
 が自ら発起し、自ら鞭つて、己れを陶冶しつづける努力
 を日常生活の中心に定置したという個性の強さ、ねば
 り、そしてやはり激しさなのである。先生の葬送後多年
 の盟友の一人が日記のこの件を見て、「それだけの苦
 勞をしたとは全く知らなかつた。」と頭を下げた感嘆し
 ている。

激しい性格をむき出しにせず、克己陶冶して内部の
 おのれを慎重に育てて行つた青年のなかに、後年の自由人
 上田、自由の尊厳を思うだけに自らを慎しむ自由人、が
 牢固として生長しつづつたのだと考えられる。

四

先生は数回の国外生活のうち最も多くを英国で過ごしている。それだけ、よい意味の英国風の自由人社会の風格を身につけ、そうした印象もまた人に与えることが多かった。

しかし、それにもかかわらず、うちにひそめて燃やした続けた激しさが時にふれ迸り出でざるを得ずして迸り出て、人を驚かしている。たとえば、学生の頃わたしたちが作ったSPS労働学校に無報酬で出講された日々の先生の講義や、後年同校が弾圧をうけた時の先生の行動やにその片鱗が見られた。その後昭和六年東京商大予科専門部廃止案反対のため一橋に学生が籠城した時の先生の出所進退も他の一例である。たとえば、この籠城事件の時学生の街頭デモが警官隊と衝突した直後、当時開き放し同様であった教授会で、学生係関係の一教授がつよく籠城解散命令を出さねばならないと主張したのに対し、「学生に何の悪いことがあるか。正しいことをするものに解散の命令を出す教授会ならば自分は即刻辞職する」と卓をたたいて反論、退席してしまった。学生ととくに

自由を愛する人のもつ固さ、はげしさがその人の平素の穏かな外貌をつき破って正体を示したのであった。

この迸り出たはげしさに驚いた人のなかには、先生を「豪傑ですよ」と評した今はなき一教授もある。しかし、この評言のもつ封建的な臭いはむしろ先生には縁遠い。実は、始めの英国の留学で英国の生活のなかにある保守主義に感銘をうけ、始めより多少その方に傾いたことを先生は自ら認めている。しかし、このことは日本人としてはむしろ自由主義的であることにおいて顕著であった先生に多少のニュアンスをつけたものと解釈すべきである。たとえば乃本希典の殉死に対しては、日記の中に、古法に適った自殺の方法に一つの敬意は払っても、殉死そのものは、世上賞める人多くとも「自らはいやだ」といっている。この見識は、明治末年の日本においては、高い水準の近代感覚を反映することなのである。滯英所感にも、人格とか自由とか親権主義とかについて所懐が折にふれ示されているが、「武士」的なものに同情はあっても、合理的な人間の自由とその尊重といった近代的なものが先生の見方の中心に潜んでいたことは動かし得なかったのである。

先生のうちにもつ鋭い個性は、単なる豪傑式個性ではなく、近代的社会的な自由、ひいて学問的自由に徹しようとする固さ、激しさであったといえる。今からその自由の見方には色々の批評ができるであろう。しかし、明治から昭和にかけての日本で欠けたのは、形だけでなく真実にまで徹した自由の理念とこれを求める熱情であった。その熱情を、克己して得た穩かな外面に包んで先生は長じてもお押しすすめているのである。

その出発点である己れの反省、修養は、たとえば、四十に近く、孤立の勇あるも「雍容の風」に欠けて人を容れることの足りないおのれを自ら戒める努力が続けている。先生の芯をなした自由の理念は勿論英国的教養の所産たる面もやはり強かったと見ねばなるまい。しかし、批判のない英国一遍倒とはおよそほどとおいところに先生がいたことを忘れてはいけない。たとえば、英国人に知識、学問を重んずるにおいて足りない先生は指摘することに躊躇しない。

明治四〇年、欧州にあって先生は、「個人の価値を認めること軽きに失して居る」のが明治の道德教育の短所だと規定し、同時に自ら社会改良のために「理論の人よ

り實際の人となりたい」と願望し、その上で、「個人の自由を認めることが実に社会を維持発展せしめる要件である。……個人も社会も手段・目的の関係を有するものではない。人生の帰趨は向上進歩である。人格の向上、人道の発展ということが個人の目的でもあり、又、社会の目的でもある」と明記している。そこには、上田式の簡潔な表現からくる不明点がないわけではない。しかし、ここで、先生における自由が実践的行動の核にすえつけられた発動機であることがはっきりと知られるのである。

だから、先生には、書物のみならず、現実の知識観察や経験から得られた合理的実践的知識に基いて自由に判断し、批判し、行為するという特徴がつよい。そのような先生の内面から出た学者上田としての行動は、たとえば、大正一五年（一九二六年）から昭和三年（一九二八年）にかけての『企業と社会』誌の創刊、主宰となっている。主として理論でなく日本産業の実体を土台にして、自由と社会の尊重を説き、企業の動向に指針を与えている。第一回国際労働会議（一九一九年）への日本代表団員、通商自由を決議した国際経済会議（一九二七年）への

日本代表団員、その後東西の実業家を組織した自由通商協合理事等々における活動も、同根の成果であり、決して偶然の思い付ではない。ただ、この場合、その働きかけが主としては企業に向けられ、かつその標語として「新自由主義」なる言葉を自ら使用したことは、多少その論旨を徹底させる上で不充分であったところも残したようだが、西欧的理論の舞台だけで明け暮れていた日本の経済学界において、日本産業の現実の中で経済学的思索をすすめる自由と社会への顧慮の必要を叫びかけるという一点において、上田経済学の特色を貫くとともに、実に自由人の本質、とらわれるところなく只管己れの実証的科学的知識にのみ立脚して批判し判断する自由人のなし得る行動を示すものであったといえる。

つまり、上田先生は、学者として、陶冶し切磋して形づくられた自由人であったからそのために外面的には穏かで角のない自由人として人の眼にうつったが、しかもその中核である自由のためには時到了ればその激しさをかくさない自由人であったのである。理論より実際の中に足をおいて克己から生れた自由の把握とそのような自由から生れた学問、その総合の上に立つ士族的東京人、こ

れが出来上った上田先生像だったのである。この内容と外観との結合は正しくあらわれた平凡とひめられた非凡との架橋であった。先生は、東京商大学長就任間もなく、教授懇親会での雑談の席で、故吹田順助教授と「平凡な非凡人だ」「いや非凡な凡人だよ」と応酬談笑していた。自由人上田貞次郎を表現し得てまことに妙であった。

したがって、この非凡な「凡人」のもつ自由人的性格は、平凡な外面にもかかわらず、非凡な強さをもったという意味で社会的反撥も生んでいる。ここには、反動的保守主義の反響を例示しておこう。先生の最後の数年は日本が満州事変後急速に戦争の路を辿り、固陋な国粹主義が支配した時代となっている。たとえば、憲法における機関説によって美濃部達吉博士すら逐われる時代であった。一橋では、上田博士がひとりこの時流を代表するもの（例えば養田胸喜ら）によって指弾追求されつつあったのである。

五

上田経済学は、以上のような自由人上田と才能のすぐ

れた学者上田を土壤としてはじめて花咲いているのである。二〇世紀とともに開かれた経済学での先生の歩みは今の平均年齢から見れば短命であったにもかかわらずひろくふかい。その著書論文は数多いだけでなく、その関係範囲がひろい、『上田貞次郎全集』七巻が先生歿後計画され、第二巻『株式会社論』（昭和一九年）第六巻『人口問題』（昭和一八年）まで日本評論社から刊行されたが、第一巻『商工経営』第三巻『産業史論』第四巻『経済政策』第五巻『商業政策』第七巻『日本経済問題、附著作目録』の五巻は、戦局悪化のもとで未刊となっている。これらの著作を正しく理解し評価するためには、勿論すべての学説史研究の場合におけると同じく、その学説が作られた時代の社会と関係づけるとともにその学説の主人公の人となりと結びつけることが必要である。上田先生の学績の場合もまたその選を異にするものではない。しかし、上田先生の場合において、とくに、後者が極めて重要であり、それによって始めて上田経済学の歴史的意義と高さが正しく把握されるのである。

先生が方針を一転して学界に足をふみ入れた出発点では、教師としてでなく、学者としての自信をもったから

と上田日記からみることができる。専攻部学生上田貞次郎の学士論文「外国貿易論」（明治三五年、翌年公刊）は、正統派経済学の流れを汲むものであったが、それは福田教授によって「白眉」と絶讃される内容をもった。恐らくこの論文の作成が学界転向の一つの大きな転機をなしていると思われる。したがって、ここに頁を開いた上田経済学はその後の本流の展開を予想させる学才がすでに準備されていたことを示していたとすることが出来る。しかし、この学問的才能の閃きだけであとに続く学問上の歩みは説明することはできない。この学才あればこそ、もちろん後年の上田経済学は大成するのであるけれども、その方向や性格や発展のしかたやは、この学才を担うものが自由人上田であったが故に始めてあり得た方向、性格、歩み方であったのである。

その上で、上田経済学の性質として挙げねばならないことは、止まるところを知らない研究の発展ということである。凡そ、一国に支配的影響をもつ学者は止まるところのない研究発展の人であることが普通である。しかし、それには色々の型がある。積み重ねて生涯の業績を集大成する型、逆に天才的に指導理論を逸早く構成し、

その部分部分を順次埋めて行く型とに大別し得よう。併し、何れにせよ、多くは、その生涯が一つの業績の山に帰属することにおいて大体等しい。しかし、上田経済学は、この何れにも属さない展開型なのである。つまり、その展開は勿論一つの上田経済学ではあれ、展開の一段一段は一つずつでも、それだけで一つの業績として評価し得る多面的展開を遂げているという特色である。

このような多面的展開を、その時期によって、少くとも大体四つに分けることができる。

前記の学士論文の次に、『商業史教科書』（明治三八年）で後に著しい特色となる実証的歴史的研究方法を示唆したあと、第一の時期は、第一回留学（明治三八―四二年）以降に展開する。日本が二つの戦争を経て漸く資本制生産を確立し、工業国化しつつあった時がその背景である。正統派経済学からドイツ歴史学派の影響が日本の学界を支配していた時である。この期を代表する業績は『株式会社経済論』（大正二年）として与えられる。株式会社の経済的本質を証券制度、従って持株自由制度にありとした画期的業績であり、わが国資本制企業経済の国民経済的分析の礎石とも称すべき内容をもった。本来法

律概念ではあるが株式会社制こそ資本制企業の典型であり、わが国で始めてこれをその経済的本質においてとらえるという先駆的問題意識と、その立場による体系的分析とがそこに展開されているのである。この研究の画期性と独創性は、当時の学位授与機関である博士会から法学博士の学位を贈らしめているが、しかし学問上もつ意味はこの学位授与をはるかにこえるところに発展している。第一次留学の頃屢々先生の研究活動のなかに現われている商業経営論の体系化の努力は、この株式会社経済論を通じてわが国での経営経済学の源流となっており、更に、故増地庸治郎博士以下による日本の経営学の中核的な系譜をその門下から生み出すことになっているのである。ただ、早くから先生は国民経済学の立場を捨てず、所謂私経済学の体系化は終にこれを否定している。そして先生は、日本経営学会の創立育成にも当るが、この本来の立場のままに、後年の『商工経営』（昭和五年）、とくに『経営経済学総論』（昭和十二年）に先生の企業理論は集大成されるのである。

第二は日本が産業革命段階から抜けでて世界の産業化国の一つ、非欧文化圏で唯一の資本制生産の国となりつ

つも、なお、多くの前近代的な矛盾を内に蔵せざるを得ぬ構造的な国民経済なることを歴史的に明らかにしつつある時である。そして第一次大戦後の世界では資本主義的矛盾が高められ、かつロシア革命がおこり、わが国も社会問題とマルクス理論との急速な成長を経験しつつある時である。二回の留学に際して、アッシュレーによって端的に開かれつつあった歴史的経済分析法、ウェンツプ夫妻の社会主義的実証的資本主義分析法、によってうちに潜んでいた上田的「方法」がいわば点火され、引出された業績ともいべきもの、いいかえれば、理論的より実際のしたがつて歴史的、研究者的静観より改良家的行動、を特色とする研究の凝集、がこの時期に公けにされている。論文集『社会改造と企業』(大正十一年)『英国産業革命史論』(大正十二年)を中心とする研究がこれである。前者は資本制社会での経営者職分の社会的意義の分析を中心にする。その分析の正しさは、当時のマルクス理論(河上肇『社会問題研究』)まで公けにこれを認めるところとなっている。一九六〇年代のわが国での企業者職分の理解の如きも、その本質的部分は既にここに明示しているところでさえある。後者のもつ先駆性は英国産

業革命史研究が英本国で第一次大戦後大きく起った潮流だということを想起すれば思い半ばにすぎよう。いうまでもなく、わが国でも産業革命、近代経済史研究の道を開いた画期的労作たる地位をしめる。わたしはわが国の現在の近代経済史論者の一部で産業革命史研究としてのこの労作の価値を既に古いものとしているもののあるのを見たことがあるが、かくの如きは成立したばかりの日本資本主義経済を背景に既にして英国を対象にとってかかる分析を展開された先生の業績の鋭さを見ることをあやまった史論家的でない史眼であるとせねばならない。

第三段階は雑誌『企業と社会』(大正十五年―昭和三年)を創刊、主宰した時代である。ここに、第二期に示された歴史的、社会的、実証的、政策意欲的「方法」は、当面の日本資本主義分析となって結実している。この個人雑誌ともいべき月刊雑誌は花々しい存在として大きな社会的反響をもったが、先生は各号で一応日本産業の諸面の分析を一巡するとともにあっさりと廃刊している。しかし、先生はこの日本の産業経済の実証的歴史的分析を開始するに当って、自らの立場を「新自由主義」と名乗ったために、わたしの如きも、自由主義について「新」

という形容詞に必ずしも嫌らないわけではなかった。しかし、くりかえすように、ここに示された先生の関心は、日本の資本制企業の自主性の不足と古い事大主義を指摘し、新しい世界段階にある企業の社会性を同時に強調指摘するところにあった。そして、その論旨の展開に当たって歴史的方法を駆使し続けたのである。それこそが「企業と社会」の重要な学問的意義だったのである。

第四は、昭和七年以降の人口問題の研究であって、先生としては、この学問的関心をもっているままで急逝されている。しかし、『日本人口問題研究』三巻（昭和八年―十二年）のなかですでに先生の業績は確立されていたのである。すなわち、年齢別人口構成の研究を通じて、生産年齢階級人口の増大を予測し、人口問題を単なる総人口問題としてのみ論じ続けてきた日本の人口研究の不毛を教えた。現代の人口問題は職業、雇用、生活水準の問題として正確に論ぜらるべきこととその可能な所以とを日本人口に即して実証したのである。現在では、こうした人口分析が宛かも自明のことの如く見られ易いが、上田先生の分析はここでも実は世界の同様な人口研究の潮流の先駆の一であったとともにわが国人口研究の方向

を一挙に修正し、その後現在にいたる日本人口研究の主流をここから導き出したという指導力をもったのである。

この人口研究については、附記したい挿話がある。先生がこの分析を当面の研究にとりあげられたのは、昭和七年、五三歳をこえていた。すでにその前から日本人口についての知識を蓄えていたにもかかわらず、この時に当って最初に行ったのは、統計局を自ら訪ね、日本人口統計の集計の第一歩から統計局担当官に尋ねかつ確かめることであつたのである。そこにはあたかも若い初学者が研究を始める時の気軽さ、謙虚さと、恐るべき手堅さとが横溢している。そして、この一歩から数年にして人口問題の潮流を一挙にかえる業績をうちたてる学問上のエネルギーももつのである。

以上に辿った発展は、先生の死によって、四段階で終つたが、この事實は、先生の学者としてのエヴァ・グリーンともいふべき若さの持続、既成の研究の上に安住しないあくなき前進を、示している。そして、同時に日本資本主義の段階段階毎に問題を一つ一つかつ逸早くとりあげ、日本の経営学体系の創始者、産業革命研究及び企

業の社会性研究の形で資本主義形成の歴史的分析方法の創始者、現代人口研究の指導者として業績をうち立てたことも示している。しかし、この一連の前進、業績の集積が一本の太い金線で貫かれている一連であり、集積であることこそ、最も重要な点である。一本の線とは、この連続発展の結び目にある一々の問題意識がなぞったか、である。この意識は、単なる学才の进りの連続ではなく、前にのべた自由人上田の眼力による問題発掘であったのである。さきの四段階は、自由人上田が社会と共に成長するにつれ、当初のかなり単純な学問的興味による問題設定から、社会的評価をもった問題意識に進んでいることを明示している。そして、第四段階の人口問題研究の視角が、人口論ではなくて、雇用論であり、失業論、潜在失業論であったことはこの推移を極めて鮮かに露わしている。わたしは、このような人となりを支えるものがあって、始めて、先生の学才をして、日本の経済学における特色ある一人の可能な最高水準の業績の樹立者たらしめていると見るのである。

しかし、然らば、具体的には、どのような過程で、自由人上田の人となりとその学問的業績とが結びついた

か、については、なお指摘されねばならないことがある。つまり、先生の研究上の態度、あるいは、学風といったものに示される先生の当時の学界における特色、がこれである。

六

その特色の一つは、現実的、実学的、経世済民的、改革者のといえる趣である。先生の研究は理論からでて理論にかえるといった風は少い。具体的事実にして研究するという実学的態度は、研究者上田の初期から行動に現われていたが、アッシュレーの「沸騰する問題解明に歴史的方法を用いる」という態度に刺戟されて、いわゆる歴史的分析を自らのものとして逸早く確立している。

経営学を体系化の面から疑い、一部聴講した英国の大学教授の理論的不足に批判的であったほどの先生は、自らの研究上の特色を実学的なることにむしろ力めている。

たとえば、大正七年社会政策学会で「小工業問題」が討議された時、三人の報告者のうち、先生は、歴史派的発展段階説に立ちつつも、日本の事実の上に立って議論している唯一の人であり、又そのために予め本所のスラム

を観察していることを日記に記している。だから、先生の研究方法には、多読よりも多見又は多聞という特色が早くから著しい。博引旁証は先生の特技ではなかった。

後年時によると著書ができた後で参考文献目録を作ることにすらあった。その代りその読書は精読であった。ただ先生は読書より得ることも当然として、さらに見聞による収穫を著しく重視した。だから、先生の留学には始めから工場その他の視察がきわめて重要な地位を占めている。そしてこのことは先生の幼時からの旅行好きとも深く関係すると思われる。明治三八年の第一回渡欧から、大正二、六、八、昭和二、六、八、一一、一四年と度重なる国外旅行のほか、国内旅行は学生時代以来の趣味であった。晩年の望みは閑暇を得て日本国内を行脚することにあった。もちろん、見聞は機会が限られ、その意味で研究上の意義は限られるものの、自らの体験に基づく立論の強靱さが抽象的翻訳的論議の横行したわが国で先生に異常な地位を与えたことは明らかであろう。

だが、こうした実学的態度は、他の最も逸し難い特色とかかわることである。すなわち、先生の研究が正しく先生の研究であったということである。これは当り前の

このように、実は先生の生活された時代の日本では当り前ではなかったのである。明治以来わが国の学問は西欧のその吸収に急なあまり、前記のように、学問文物は字義通り「輸入」であり、「翻訳」であることを余儀なくされたからである。先生においても、第一回留学の際あまり好遇されなかったにもかかわらず、アッシュレー教授の大きな肖像写真が先生の書齋をかざっていたほどその研究にひかれていた。アレヴィ、シューマツヒア、チャップマン、ウェップ等の氏名が先生の留学日記にも散見される。しかし、『株式会社経済論』『社会改造と企業』『英国産業革命史論』ないし人口政策研究になると、それらは、西欧の学問の成果の輸入を主とするものではなく、日本の現実に立った先生独自の研究であり、世界の研究に一步を先じたものだったのである。たとえば、初期の研究に属する経営学の体系化についても、それは、正しく先生の頭脳の中で自成的につくり出されているのである。また、アッシュレーの歴史的方法の如きも、先生自ら留学の獲物といっているが、これを獲物として自らのものに化する学問的準備があったことを示すに外ならない。

つまり、先生の業績は、上田貞次郎という日本の学問研究者の個体でこなされた研究成果であつたのであり、その故において、先生は日本経済学のすぐれた指導者だつたのである。学問上の系統によつて上田経済学を規定しようとする人は、マルクス経済学派ともしないと同時に、恐らく歴史派あるいはフェビアン系とも断定しかねるだろう。正統派の影響は大きいとしても、歴史的方法をとることでそれとはなれたところに先生は立っている。わたしは、むしろ、西欧の学派の区別で断定し得ないところに上田経済学の特色は発見さるべきだとさえ考へる。学会（たとえば経営学会等）でも研究組織（たとえば、人口研究に當つた日本経済研究会や日本學術振興会中小工業小委員会）でも、先生は翼の左右をとわず、研究対象を等しくする者は来るを拒まず、むしろその広きを喜んだ。だから、先生の下では、マルクス学派の研究者も近代経済学派も経済史学者も、理論を闘わすことを緩めることなく、しかも一つの研究に協力し得ている。異つたものの和して同ぜざる研究が自由人上田にして可能とされたのであるとともに、批判を通じての異つたものの吸収、総合という再び自由人上田の学問に対する態度がこ

こに示されているのである。

先生においては、その独自の業績を公けにするのにさきにあげた淡々たる風格が結びついて、そこにも、個性にみちた業績の表現が生れるのである。そのために、これらの業績は、その消化し閑説する範囲がひろく独自の深さをもつにもかかわらず、先生の手にかかると、よみよく且簡潔にまとめられた分量になつてしまつている。読むものは往々にしてその形の大ならざると坦々たる分析の展開のために、その藏する深さや広さや苦心やに気づかずして過ぎるほどである。この傾向は、研究段階の後半において次第にはつきりしてきているように思われる。改めて、再び、「文は人なり」を感じしめるのである。

しかし、最後に特記しなければならないのは、先生が「考える」学者であつたことである。そしてこのことこそ、先生は日本の経済学の指導者の中で際だって特色づけるものであるとわたしは考へる。大正中期以降の先生の学問に明白に現われたように、「現実」の日本経済の中に立つて社会経済的な「問題」をとり出し、これを「考える」ところに先生の研究が方向づけられてい

る。この「現実的」「問題意識的」「考え方」は、日本資本主義の成長そのものが提出する問題を前にして、人間のための経済、人間からみて人間に帰る経済という社会観の動きの表現であり、その動きは、さきの自由人の社会への愛着、尊重をその底にひそめている。後の段階の新しい問題への一つ一つの追跡がこれを説明していることはもはやくりかえさない。しかし、こうした問題意識とか「考え方」を抽象的あるいはドイツ的方式で先生は一々断らない。わたしは、先生の経済理論は歴史的方法による理論化とみるものである。天もし先生に尚齡を与えたなら、恐らく、その理論の形で体系化を示されたであろうし、又、それが「ある形」をとることをわたしなりに想像もしている。しかし、それは先生の急逝によってたしかめざる課題となった。

一橋での二年ほど先輩であり、大学の同僚でもあった三浦新七博士は先生も是認した獲難き学問上の論友であり、遇えば常に学問を論じあって尽きなかった。三浦博士が概念を厳密にし、理論的であるのに対し、先生は実行的具体であることを誇っていた。先生歿後三浦博士は、わたしに「上田はデンケンしない」と語られてい

る。しかし、日本の問題と共に歩み、「考え」の独創の中に進んでやめなかった上田経済学の特質はまさに独歩のものとすることに変わりはないから、他のやや年若き一友（小泉信三博士）は、思想的、学問的に年をとらず、老人らしく心の硬化しなかった学者だとしている。「考える」学者であってこそ、かくあり得たのであり、ここにもまたとらわれざる自由人としての先生の真面目が貫かれていたのであった。

七

先生は、大阪市政に名をのこした元東京高商教授関一市長の勸奨で、大正、昭和の交、市立大阪商大の創設経営を引受けかけたこともあるが、終始一橋にあって、内外の学界活動にひろく従われた。法学博士（大正八年）、帝国学士院会員（昭和十二年）等の推薦はその一つの反映である。晩年の人口問題や中小工業研究では国外で高い評価を与えられたにひきかえ、国内でいゆる総合雑誌の花形になるが如きことはなかった。しかし、自由を愛し、社会を愛した先生の本質は、表面の洒々落々たる「平凡」さにかかわらず、先生にふれる青年の心をとら

えねばやまなかった。四〇歳の頃胃をやんだが回復した先生は自らも意外とした盲腸炎のため急逝した。この急逝に遭った時の東京商大学生は期せずして自らの力でこの恩師の面影を永遠に学園に残したいという悲願に結集した。この悲願による依頼をうけた後の文化勲章受賞者朝倉文夫は、思いがけぬ師弟愛に感激して、殆ど無償で二基の胸像を製作した。その感激は同氏の随筆として後に雑誌『文芸春秋』であったかにのせられている。今その一基は同氏の選定した一橋大学のグラウンドの一角にある。そして他の一基は上田家に寄贈されたが改めて大学が寄付をうけて図書館楼上にある。こうしてこの二基

の上田先生像は生前の先生が若い学生を愛し続けたように一つは運動する学生をそして他の一つは読書する学生を永遠に見守っている。一橋大学は多くの教授の画や像で飾られている。しかし、学生の悲願と、これにうたれたすぐれた彫塑家の義心との結晶である作品は、上田先生の胸像を措いてない。先生の父は、先生によれば、学者としてより教育家として大きな足跡をのこしたという。二基の胸像は、先生が、経済学者として高い業績を築いた上に、更に父の子として教育者としても比類のない業績をのこしたことの記念碑なのである。

(一九六五年一月末日)(一橋大学教授)